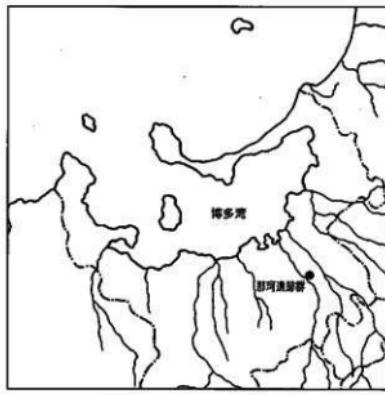


那 珂 62

—第129次調査の報告—



遺跡名 那珂通跡群第129次 調査番号
那珂通跡群 NAK-129 1008

2012

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くから、大陸よりもたらされる様々な東アジア文化を受け入れる窓口として栄えてきました。人や物の交流は盛んで、その結果数多くの歴史的遺産が育まれ、今日に至っています。これらかけがえない遺産を保護するという立場から、福岡市教育委員会では、市内の遺跡把握に努め、必要に応じて発掘調査をおこなって、往時の有り様を後世に伝えています。

本書は平成22年度におこないました、那珂遺跡群第129次調査の内容について報告するものです。本書が市民の皆様の埋蔵文化財、ひいては地域の歴史に対する理解の一助となり、ご活用頂ければ幸いです。

最後になりましたが、今回の調査において、様々なご協力をいただきました、関係各位に深く感謝申し上げます。

平成24年3月16日

福岡市教育委員会
教育長 酒井 龍彦

一 謹 言

- ・本書は福岡市教育委員会が、平成22年度に実施した那珂遺跡群第129次調査の報告である。調査は齋藤士寛が担当した。
- ・本書における方位は座標北（日本衛星系）であり、遺構についてはSA（衝列）、SB（掘立柱建物）、SD（溝）、SK（土坑）、SP（柱穴）、SR（木棺墓）、ST（櫛棺墓）といった略号を使用している。
- ・本書の執筆、編集は齋藤士寛がおこなった。
- ・SK215出土鉄器の処理および縮微の写真撮影については福岡市埋蔵文化財センター西澤千絵里氏による。氏には様々なご教示を受けた。記して感謝したい。
- ・本書に関する資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。

目 次

I.はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
II.位置と環境	2
III.調査の記録	4
1. 調査の概要	4
2. 遺構・遺物	4
(1) 龫棺墓	4
(2) 土坑墓	11
(3) 溝	12
(4) 掘立柱建物	12
IV.まとめ	13

挿図目次

図1 那珂遺跡群 (1/5,000)	2	図8 龫棺1 (1/12)	9
図2 周辺の調査 (1/1,000)	3	図9 龫棺2 (1/6・1/8)	10
図3 調査範囲 (1/300)	3	図10 土坑墓 (1/60)	11
図4 龫棺墓配置 (1/60)	4	図11 SD014・213 (1/60・1/3)	12
図5 那珂128・129次調査 (1/100)	5	図12 掘立柱建物 (1/80)	13
図6 龫棺墓1 (1/30)	7	図13 SB028出土遺物 (1/3)	13
図7 龫棺墓2 (1/30)	8	図14 木棺墓・鰐棺墓配置 (1/80)	14
		図15 SK215出土遺物 (1/2)	16

図版目次

図版1 SK215出土鉄器	
図版2 1 調査区全景 (北東から)	2 龫棺墓群 (北東から)
3 ST202~205 (南西から)	4 ST204・205 (東から)
5 ST208~210 (南西から)	6 ST210 (南東から)
図版3 出土遺物	

I.はじめに

1. 調査に至る経緯

平成22年3月26日、博多区東光寺町一丁目376-4における共同住宅建設に対し、埋蔵文化財の有無に対する照会がなされた。その場所は埋蔵文化財包蔵地内（那珂遺跡群）であることから、埋蔵文化財第1課では確認調査をおこない、現地表下40cm前後で遺跡の存在を確認した。

この結果を受けて、両者協議の結果、工事に対する遺跡への影響は避けられないということになり、遺跡の記録保存という対応が採られることとなった。発掘調査は平成22年6月1日に開始し、同年7月7日に作業を終了した。調査にあたっては関係各位に多大なご協力を賜った。記して感謝したい。

2. 調査の組織

調査は以下に示す組織で実施した。

調査主体 福岡市教育委員会

(1) 平成22年度（調査）

事前審査	埋蔵文化財第1課	課長	濱石哲也
		事前審査係長	宮井善朗
		主任文化財主事	加藤良彦
		事前審査係	木下博文・藏富士寛
総括	埋蔵文化財第2課	課長	田中壽夫
		調査第1係長	米倉秀紀
庶務	埋蔵文化財第1課	管理係	井上幸江 古賀とも子
担当	埋蔵文化財第2課	調査第1係	藏富士寛

(2) 平成23年度（整理・報告）

総括	埋蔵文化財第2課	課長	田中壽夫
		調査第1係長	米倉秀紀
庶務	埋蔵文化財第1課	管理係	井上幸江 古賀とも子
担当	埋蔵文化財第2課	調査第1係	藏富士寛

整理作業 大石加代子 萩本恵子

遺跡調査番号	1008	遺跡略号	NAK129
地番	博多区東光寺町一丁目376-4	分布地図番号	37 東光寺
開発面積	217.79m ²	調査対象面積	115m ²
調査期間	2010.6.1~2010.7.7	調査面積	118.3m ²

II. 位置と環境

福岡平野は、西は背振山塊から派生した長垂丘陵、東は犬鳴・三群山地によって画された地域の総称である。その内、飯倉丘陵の西側に位置し、室見川流域に広がる早良平野、月隈丘陵によつて画され那珂川・御笠川流域に広がる狭義の福岡平野、多々良川・宇美川等によつて形成された糟屋平野に細分できる。

那珂遺跡群は狭義の福岡平野中央部に位置し、那珂川と御笠川に挟まれた標高5~8mの洪積台地上に存在する。那珂遺跡群の北側には、鞍部を挟んで比恵遺跡群が存在し、遺構の分布状況を考えれば、一連の遺跡として認識することも可能である。両者を含めれば、その範囲は南北2.4km、東西1kmの広大なものとなる（図1）。那珂遺跡群には古く旧石器時代からの遺物も出土しているが、遺跡として本格的な展開を見せるのは弥生時代になってからであり、中期には台地の全体で集落が構成される。以後、古墳時代・奈良時代と遺跡の隆盛は続いている。

調査地点は那珂・比恵遺跡群の存在する丘陵のほぼ中央、那珂遺跡群内ではやや北寄りの位置にある。周囲では北側で36次調査、南東側で89・99次調査がそれぞれ実施されている（図2）。また南側では6世紀中頃の前方後円墳である東光寺剣塚古墳が存在しており、今次調査における遺構との関連も注目される。

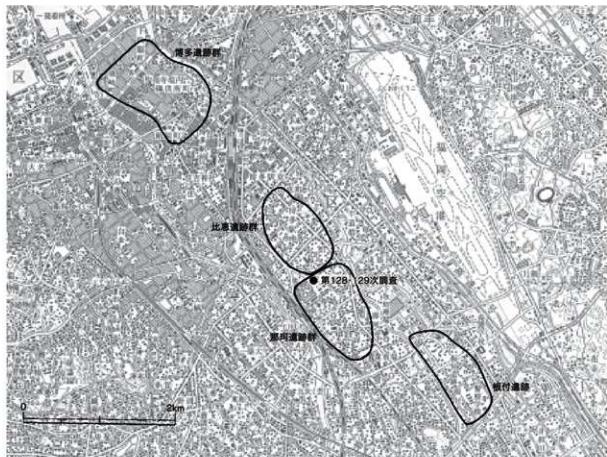


図1 那珂遺跡群 (1/5,000)



図2 周辺の調査 (1/1,000)

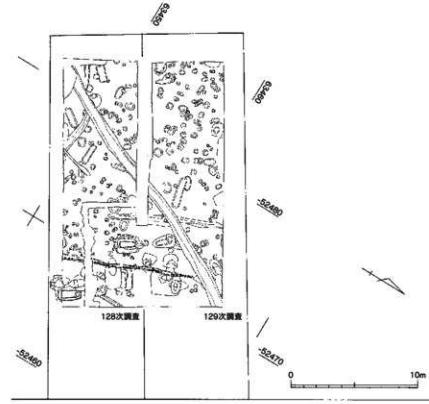


図3 調査範囲 (1/300)

III. 調査の記録

1. 遺跡の概要

今次調査は、表土下30~50cm、標高9m前後の鳥栖ローム上を遺構面とし、調査を開始した。確認した遺構には、墓、溝、欄干、掘立柱建物、土坑、ピット等がある。墓には土坑墓(3?)、甕棺墓(9)といった種類がある。以下ではそれぞれについて報告を行う。

なお、今次調査区は第128次調査(蔵富士編2012)に接しており、同じ担当者が実際に並行・継続して調査をおこなっている。溝等、同一の遺構が2つの調査区にまたがっている例もあり、甕棺墓群、土坑墓群などは両次調査の成果をふまえて統括すべきであると考え、したがって両調査区にまたがった遺構は重複を避けるためどちらか一方で報告をおこない、若干のまとめは本報告にておこなうこととする。

蔵富士寛編2012「那珂61—第128次調査の記録—」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1156集 福岡市教育委員会

2. 遺構・遺物

(1) 甕棺墓(ST)(図4・6~9)

調査区北東側にまとまって9基存在する。第128次調査の状況を考え合わせれば、甕棺墓は北西~南東方向に直線状に配列することが解る。またST204やST210といった甕棺墓を中心として、集塊をなすことを特徴として挙げることができる。以下では各甕棺墓や甕棺について、その所見を記す。

ST202 ST204を切り込む小形棺で、主軸はN=60°~W。上・下とも甕で、埋置角度は0°と水平。甕棺 上甕は日常土器の甕である。口縁部周辺のみが復元できた。断面逆「L」字形の口縁部を有し、口縁部下には断面三角形の低い突帯を巡らしている。口径27.9cmを測る。下甕は日常土器の甕である。断面逆「L」字形の口縁部を有し、口縁部下には断面三角形の低い突帯を巡らしている。口径28.2cm、器高39.0cmを測る。

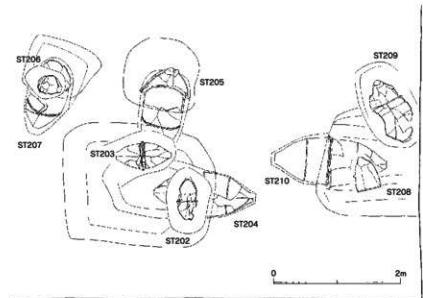


図4 甕棺墓配置 (1/60)

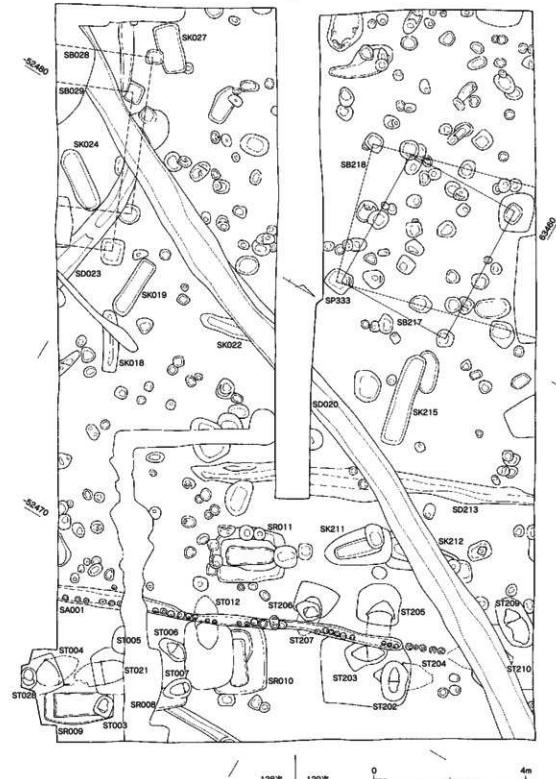


図5 那珂128・129次調査 (1/100)

ST203 ST204・205を切り込む小形棺で、主軸はS-31°-E。墓坑の形態は不明。上・下とも甕で、合わせ目には白色粘土による目張りを行う。埋置角度は-1°とほぼ水平。

甕棺 上甕は日常土器の甕である。断面逆「L」字形の口縁部を有し、口縁部下には断面三角形の低い突帯を巡らす。口径35.6cm、器高40.9cmを測る。下甕は日常土器の甕である。断面逆「L」字形の口縁部を有し、口縁部下には断面三角形の低い突帯を巡らしている。口縁部端面はわずかに内傾する。口径36.8cm、器高44.2cmを測る。

ST204 調査区北東側に存在する大形棺で、主軸はS-28-E。上・下とも甕で、合わせ目には白色粘土による目張りを行う。墓坑は平面隅丸長方形を呈し、甕棺を納めるため、北側小口部分に横穴を穿ち、墓坑の底面は断面U字形に仕上げ、甕棺をすえ付けている。横穴と甕棺の間はわずか数cmの隙間しかない。埋置角度は0°と水平。

甕棺 上甕は甕形で、断面逆「L」字形の口縁部を有する。やや内面への張り出しきみせており、端面は内傾する。胸部中央には断面三角形の低い突帯を1条巡らしている。口縁部付近ですぼまり、全体的にやや丸みを帯びている。口径50.0cm、器高73.5cmを測る。下甕は甕形で、口縁部は内外両端部が若干張り出しており、断面「T」字形を呈している。端面はほぼ平坦。胸部中央には断面三角形の低い突帯を1条巡らしている。胸部は口縁部付近でやや内傾する。口径65.4cm、器高81.4cmを測る。

ST205 ST204の墓坑を一部切り込んだ大形棺で、主軸はS-70°-W。上は鉢、下は甕で、目張り粘土は確認できなかった。墓坑は隅丸方形で、墓坑西壁は段階状を呈する。墓坑東側から斜め下方に向けて横穴を穿ち、甕棺を据え付ける。埋置角度は32°。

甕棺 上甕は鉢形で、断面鏡先状の口縁部を有する。口縁部下には断面三角形の突帯を付す。口径68.2cm、器高47.0cmを測る。下甕は甕形で、断面「L」字形の口縁部を有する。口縁部下には断面三角形の突帯を付す。また胸部中央には2条の突帯を巡らしている。口縁部付近ですぼまり、全体的に丸みを帯びている。口径58.2cm、器高96.0cmを測る。

ST206 ST207を切り込んだ小形棺で、主軸はS-7-E。下は甕で、高杯部により蓋をする。埋置角度は0°と水平。

甕棺 日常土器の甕で、口縁部は断面「く」字形に屈曲し、外側へ大きく広がっている。口径27.2cm、器高33.0cmを測る。蓋は高杯を使用する。杯部外面には突帯を巡らしている。口径16.2cm、器高24.3cmを測る。

ST207 ST204南側に存在する大形棺で、主軸はS-76°-W。上は鉢、下は甕で、目張り粘土は確認できなかった。墓坑は隅丸方形で、墓坑西壁は段状をなす。墓坑東側から斜め下方に向けて横穴を穿ち、甕棺を据え付ける。埋置角度は31°。

甕棺 上甕は鉢形で、口縁部を打ち欠いている。口縁部近くの外器面上には断面三角形の突帯を巡らしている。口径48.3cm、器高38.8cmを測る。下甕は甕形で、鋤先状の口縁部を有する。端面は内傾する。口縁部下には断面三角形を呈する1条の突帯、また胸部中央には高さのある2条の突帯を巡らしている。口縁部付近ですぼまり、全体的に丸みを帯びる。口径50.6cm、器高90.4cmを測る。

ST208 ST210を切り込む小形棺で、甕棺は底面に接する一部が残るに過ぎない。主軸はN-47°-E。単軸で、埋置角度はほぼ水平。墓坑の形状は不明。

甕棺 日常土器の甕で、口縁部は断面「L」字形を呈する。端部は外側へ大きく張り出している。端面はほぼ水平。口縁部下には断面三角形の低い突帯を1条巡らす。口径(復元)41.6cm、器高56.6cmを測る。

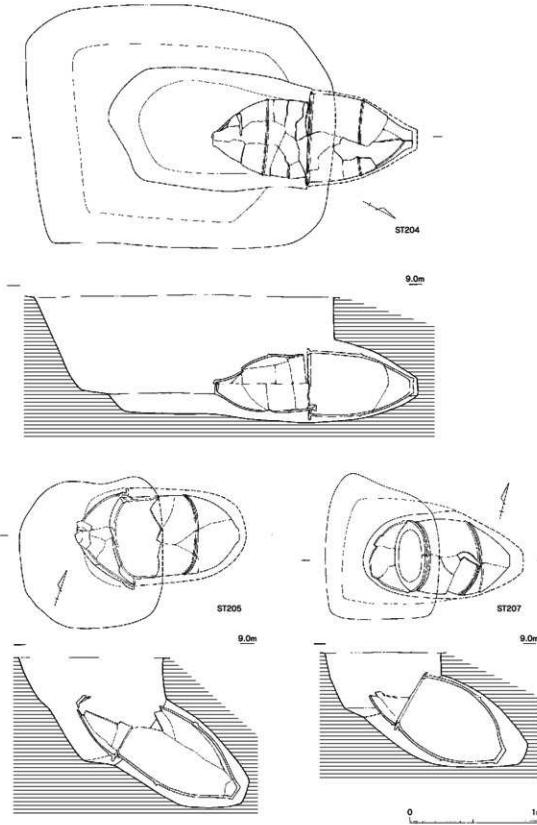


図6 甕棺墓1 (1/30)

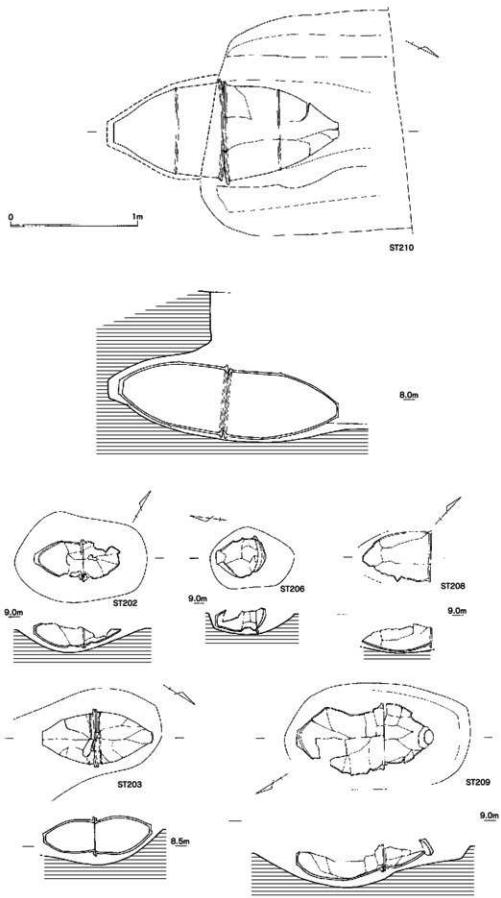
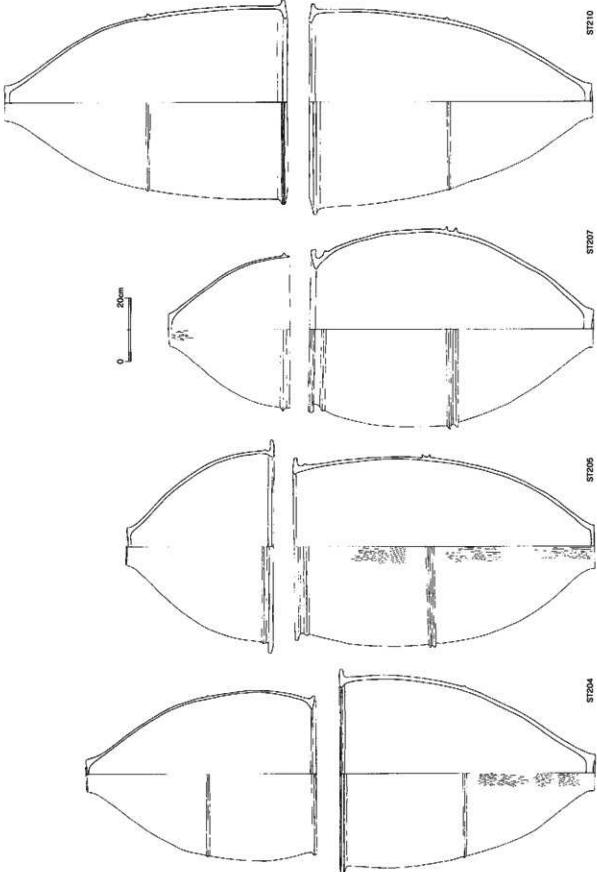


図7 船棺墓2 (1/30)

-8-



-9-

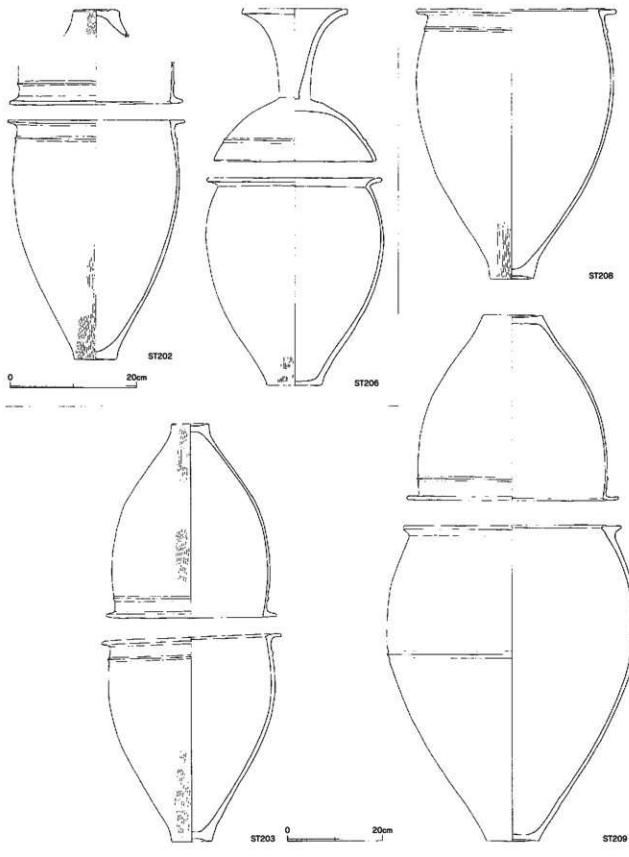


図9 豊棺2 (1/6・1/8)

ST209 ST210を切り込む小形棺で、主軸はS-32°-W。上は鉢、下は甕で、合わせ目に白色粘土による目張りを行う。現状において、墓坑は長楕円形を呈する。埋置角度は5°とほぼ水平。甕棺 上甕は菱形を呈し、口縁部は断面「L」字形を呈する。端部は外側へ大きく張り出している。口縁部下には断面三角形の低い突帯を1条巡らす。口径（復元）44.0cm、器高39.0cmを測る。下甕は菱形を呈し、口縁部は断面「L」字形を呈する。端面はほぼ水平。腹部中央やや上寄りには、断面三角形の低い突帯を1条巡らしている。口縫部付近は大きく内傾しており、全体的に丸みを帶びている。口径（復元）45.4cm、器高66.4cmを測る。

ST210 調査区北側隅に存在する大形棺で、主軸はN-20°-W。墓坑の一部は調査区外にあり、未調査。上・下とも甕だが、合わせ目に白色粘土による目張りは行っていない。墓坑の平面は隅丸長方形が想定でき、甕棺を納めるため、南側小口部分に横穴を穿ち、底面は断面「U」字形に仕上げ、甕棺をすえ付ける。横穴と甕棺の隙間はわずか数cmに過ぎない。埋置角度は-5°とほぼ水平。

甕棺 上甕は菱形で、口縁部は断面「T」字形を呈する。内面への張り出しは大きく、端面は外傾する。腹部中央には、断面三角形の突帯を1条巡らしている。口縁部から胸部中央に至るまで器壁は、直線的に立ち上がっている。口径54.0cm、器高90.8cmを測る。下甕は菱形で、口縁部は断面「T」字形を呈する。内面への張り出しは大きく、端面は外傾する。腹部中央には、断面三角形の突帯を1条巡らしている。口縁部から胸部中央に至るまで器壁は、直線的に立ち上がっている。口径54.0cm、器高90.8cmを測る。

(2) 土坑墓 (SK) (図10)

調査区中央付近では、平面長方形を呈する土坑がいくつか存在する (SK211・212・215)。このような土坑は第128次調査においても確認でき、また後述するように、SK215からは鉄器が出土していることから、これら土坑が墓である可能性を考えている。ここでは一応すべてを土坑墓として扱い、以下にその所見を記す。

SK211 調査区の北東側に位置する。墓坑は楕円形を呈し、長さ182cm、幅95cmを測る。各壁面は半ばで屈曲し、主体部の壁面はほぼ垂直をなしている。これは掘り方が崩落した結果である可能性もある。主体部は長さ123cm、幅40~60cmの平面楕円長方形を呈し、底面までの深さは25cm。主体部西側が若干頗広となっており、頭位はこちら側かもしれない。

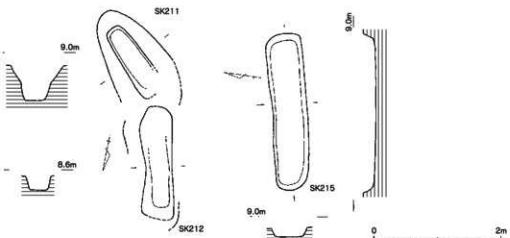


図10 土坑墓 (1/60)

SK212 SK211の北西側に隣接する。大半をSD020に切られている。墓坑は梢円形を呈し、長さ173cm、幅50cm、深さ20cmを測る。SK211と同じく、各壁面は半ばに屈曲部が存在した可能性があり、そうであれば実際の掘方は一回り大きいものとなるだろう。SK211と切り合ひ関係にあるが、先後関係を明らかにすることはできなかつた。

SK215 調査区のはば中央に位置する。平面は狭長な隅丸長方形を呈し、長さ247cm、幅55cm、深さ16cmを測る。各壁面の立ち上がりは急で、底面は平坦である。鉄器が1点出土した(図15)。ヤリガンナであろうか。出土遺物については、まとめて詳述する。

(3) 溝(図11)

今次調査では、數条の溝を確認しているが、その多くは第128次調査区にまたがつて存在している。ここではSD213について、報告を行う。

SA001・SD020 第128次報告にて記述。

SD213・014 第128次調査のSD014と第129次調査SD213は同一の遺構である。調査区中央やや北寄りをN-25°-Wに向かって直線的に走る。第128次調査区の途中でとぎれており、検出部分の長さは9m程である。幅25~90cm、深さ15~40cmとばらつきが多い。溝断面は逆台形を呈する。埋土は主として黒褐色土。

出土遺物は弥生時代のもので占められ、細片が多い。1は壺等の口縁部。断面鋸先状を呈する。2・3は甕等の底部片である。1よりこの溝は弥生時代中期後半に位置づけることができようか。なお、この溝は列状に展開する甕棺墓群と並行する関係にある。

(4) 挖立柱建物(図12)

SB217 調査区中央やや南寄りに存在する。梁行1間、桁行2間の建物である。SP333にてSB218と切り合ひ、当建物が先行する。梁行の長さは3.2m、桁行の長さは3.9mを測る。桁行の柱間は1.8~2.0mである。出土遺物は土器の細片のみで、所属時期は不明。

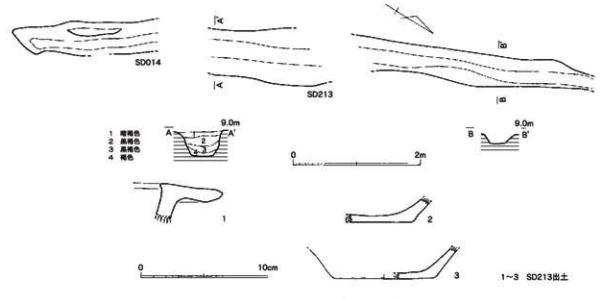


図11 SD014・213 (1/60・1/3)

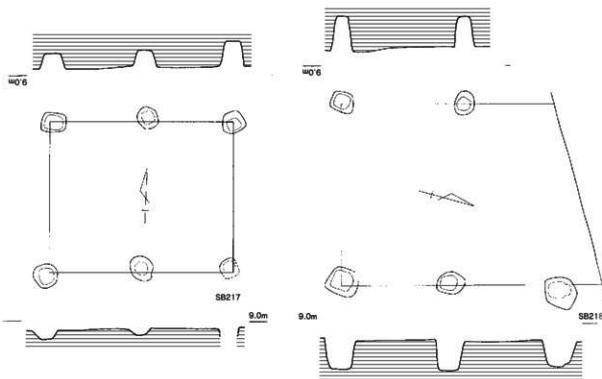


図12 挖立柱建物 (1/80)

SB218 調査区中央やや南寄りに存在する。梁行1間、桁行3間+αの建物である。SP333にてSB218と切り合ひ、当建物が後出する。桁行の柱間は3.86m、梁行の柱間は2.2~2.6mである。出土遺物は土器の細片のみで、所属時期は不明。

IV. まとめ

第128・129次調査の成果と問題点について指摘し、まとめに替えたい。

各遺構の時期について

主な遺構として、木棺・土坑墓、甕棺墓、溝(SD020・213)、欄列(SA001)、挖立柱建物(SB028・029・217・218)がある。この中で、最も新しい遺構はSD020である。出土遺物より奈良時代(8世紀後半)に位置づけられる。SB028・029は、SB028の柱穴より出土した須恵器(図13)より、6世紀後半に位置づけることができようか。土坑墓もしくはその可能性のあるものは8基確認した。SK024・215から遺物が出土しているのみで、時期の決め手に欠く。また主軸方向や平面形態に規則性も乏しく、これらが全て同時期の所産であるという根拠もない。SK024から須恵器が出土しているため、ここでは仮に古墳時代(後期後半以降)の遺構であると判断しておくことにしたい。その際、時期的に近接するSB028・029との関係、そして近在する東光寺剣塚古墳との関わり合いの有無が問題となるだろう。

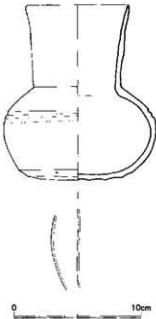


図13 SB028出土遺物 (1/3)

葬棺墓は弥生時代中期の前葉から後葉かけてのもので、橋口達也氏の葬棺編年KIIb・c～KIIIb式に相当する（橋口1979）。葬棺墓群は、並行する区画溝（SD213）を伴う。木棺墓から時期を示す遺物は出土していないが、遺構の切り合い関係より、木棺墓SR008～010は、これら葬棺群より先行することは明らかであり、したがってこれら木棺墓を前期末葉～中期初頭頃に比定しておきたい。SR010の土層を観察した際、ST012の墓坑を掘削する時点でSR010主体部内が空洞であった可能性を述べた。主体部を覆う木蓋はどのくらいの期間機能しうるのか、それを示す興味深い事例だと思う。

SA001は出土遺物からの時期比定は困難である。ただ、ごくわずかの痕跡しか残らなかったので図化し得なかつたが、表土剥ぎの際、SA001はさらに北へ伸び、SD020に切られていることが確認できた。したがって、SA001は「奈良時代の溝より古く、葬棺墓群より新しい」時期の遺構であるといえる。その性格は不明である。類例の増加に期待したい。

葬棺墓について

合計18基の葬棺墓を調査することができた。成人棺の場合、時期的には以下のようになる。

葬棺	時期	種類
KIIb～c	中期前葉	ST004・021・204・210
KIIIa	中期中葉	ST205
KIIIb	中期後葉	ST012・207

葬棺の形態と葬棺墓自体の切り合いを考慮すれば、ST021・204・210を最古の一組として認識できる。挿入方向こそ異なるが、棺主軸をそろえており、この3基は規則性をもって配列されていることが分かる。また、葬棺墓全体の分布を見れば、これら葬棺墓に向かって葬棺を挿入しているもの（ST004・205・207）や存在を意識して営まれている小形棺（ST002・003・005・202・203・208・209）も多く、この3基が中心となって、墓群形成がなされているといえるだろう。ここでは、大きくI集団（ST002～008・012・021・028）、II集団（ST202～207）、III集団（ST208～210）の3単位に区分しておこう。

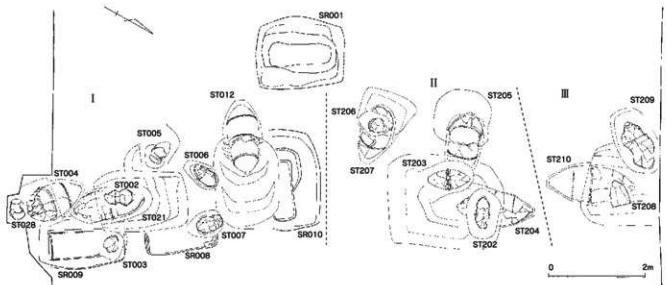


図14 木棺墓・葬棺墓配置 (1/80)

ST204と210は差し向かいて葬棺を挿入しており、II集団とIII集団はより近しい関係が想定できるかもしれないし、I集団は更にST012を中心とする一群（ST006・007）を区別することも可能だろう。いずれにしても、列状に墓域を展開する葬棺墓群のごく一部をこれ以上誇張しても、意味はない。小範囲の調査においても、核となるいくつかの成人葬棺墓があり、それを中心として後の展開を見せるという状況が看取できることを指摘すれば十分だろう。葬棺墓群の構成や展開の有り様を分析することで、親族構造など往時の社会組織をうかがう手がかりとなりうることは、すでに多くの先駆者が指摘することである（例えば溝口1997）。

ところで、葬棺墓を調査する上で、気になったことがある。それは、特に成人棺の場合、墓坑埋土は時期が新しくなるにつれて、黒みを帯びているということである。特にST021・204・210といった調査区内における初期の葬棺墓の埋土は、汚れのないきれいなローム質土を丁寧に充填している。それが一番新しい段階のST012・207になると本当に黒々としている。確かに汲出時ににおける葬棺墓の造作の丁寧さは特筆すべきであろうが、ST012の所見で述べたように、埋土の下半部はきれいなローム質土を敷き詰めており、この現象の理由は単に作業が難になっただけではないだろう。

様々な解釈があるだろう。墓坑掘削の深度も異なるし、最初はきれいな墓域周辺も、時間の経過と共に様々な植物が繁茂しているかもしれない。しかし、これらを検討する材料、つまり墓坑の土層断面図が本報告には欠けている。多くの知見が失われたことだろう。ここに自らの不明を明らかにし、周辺地域の調査において、その不備が少しでも補われることを期待したい。

土坑墓出土鉄製品について

SK215出土鉄製品には、多数の「ハエ巣蝕殻」が付着していることが分かった（図版1）。近年、このような事例が多く知られるようになったが（田中2004など）、SK215のような、堅穴式理葬施設にも存在することが明らかになった点は大きな成果である。横穴式の理葬施設で、遺体を密封する棺の使用が低調な九州などの地域では、人骨や副葬品に「蝕殻」の痕跡が検出されるのは理解できる。遺体は室内に晒されており、閉塞部分さえ除けば遺体と対面できるのだから。

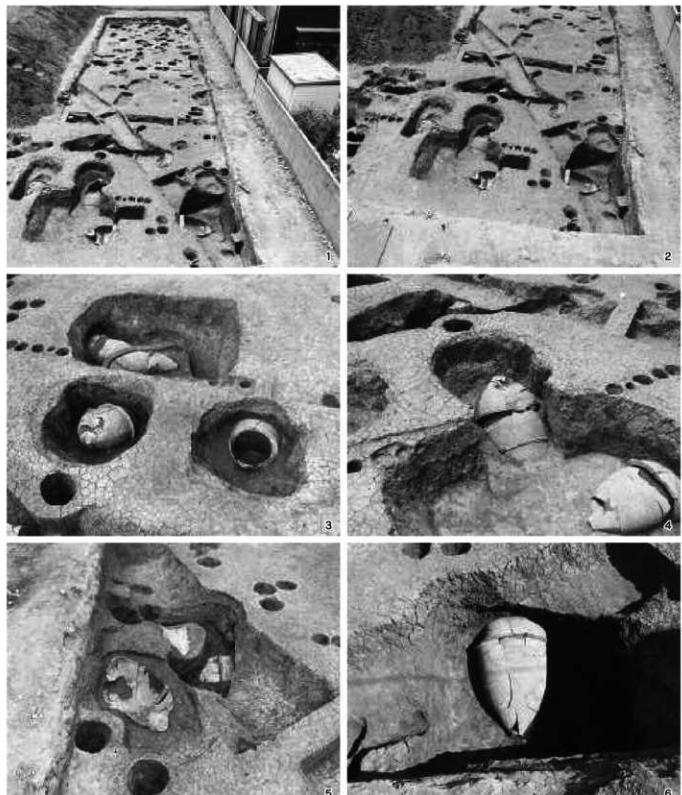
古代においては、人が死を迎えた際、一定期間の「儀礼（殯）」を終えた後、「墓」の中へ納められる。もし、「壙たかる」状況直前の短期間で殯を終え、速やかに土中に埋葬したと仮定すれば、密閉された漆黒の空間の中で、SK215の場合のような、精緻化した副葬品にびっしりとハエの蛹が付着する状態を生み出すに至るまで、状況は進行しうるのであろうか。

むしろこれは、墓坑に遺体を納めてから、おそらく木蓋等を掛け封土するまでの間、つまり遺体が外気にさらされている時間が意外と長かったことを示しているのではないだろうか。担当者は、殯が集落内や墓所の近辺ではなく、「墓」そのものにおいても行われていた可能性を考えている。九州中部地域の横穴式石室に特徴的な彩色壁画や石屋形（平入横口式石棺）の存在は、横穴式石室が単なる遺体置場ではなかったことを推論しておらず、石屋形＝殯屋の可能性を担当者は捨てきれないでいる。殯についてはまだまだ不明な点が多いと言わざるを得ない。実態を明らかにするためには、このような小さな事実の積み重ねが不可欠といえるだろう。

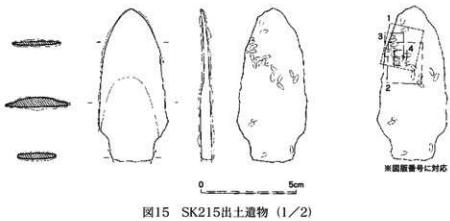
文献

- 田中良之2004「殯再考」『福岡大学考古学論集』小田富士雄先生退官記念 福岡大学
橋口達也1979「葬棺の編年の研究」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財報告』XXXI 福岡県教育委員会
溝口孝司1997「二列埋葬墓地の終焉」『古文化譲渡』第38集 九州古文化研究会

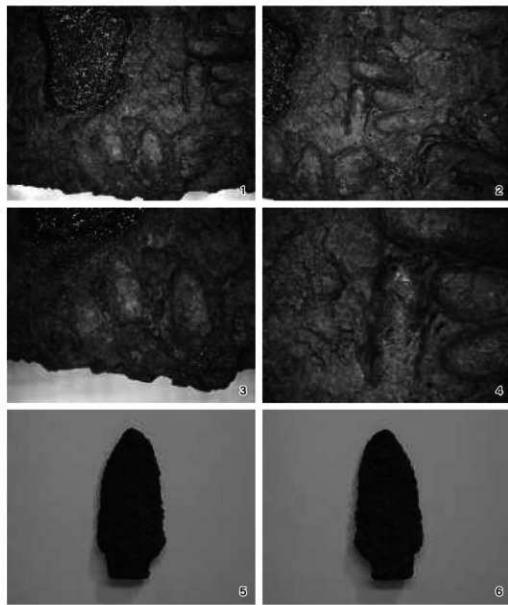
図版2



1 調査区全景（北東から）
2 貢棺墓群（北東から）
3 ST202～205（南西から）
4 ST204・205（東から）
5 ST208～210（南西から）
6 ST210（南東から）

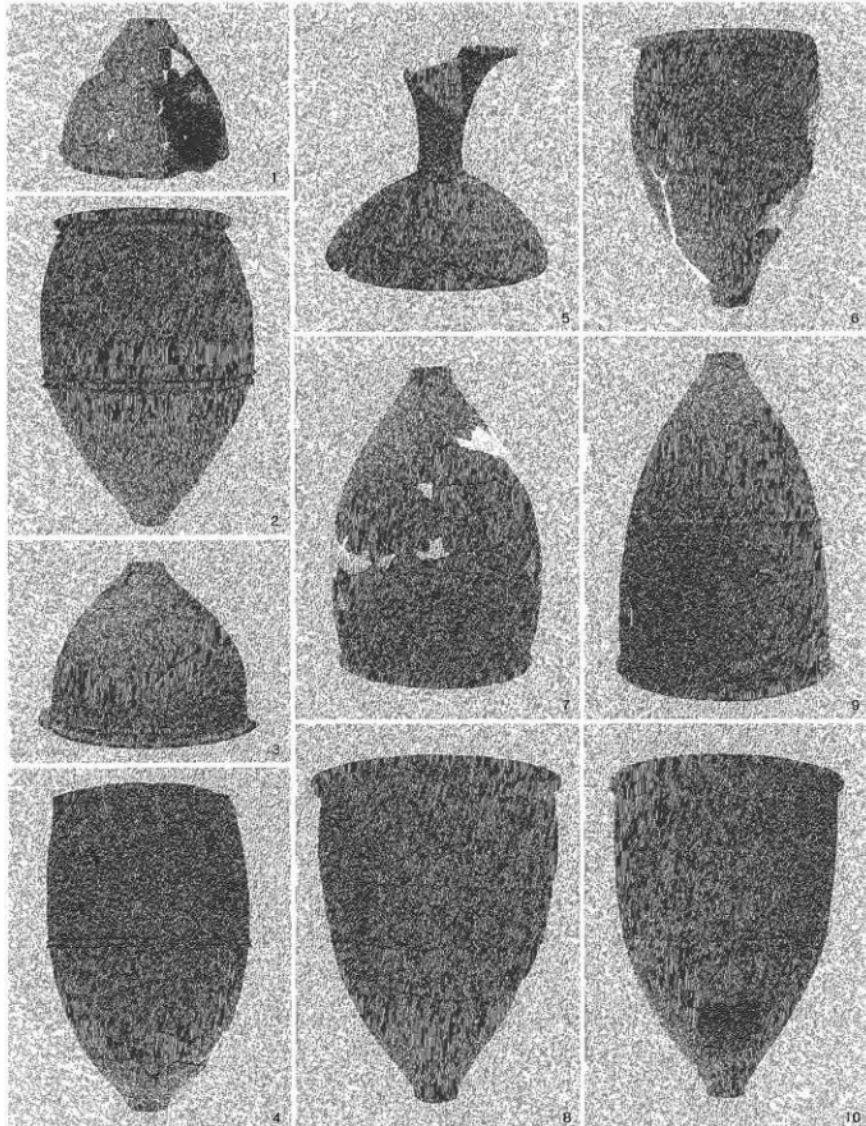


図版1



SK215出土鐵器

圖版3



1 · 2 ST207 6 ST208
3 · 4 ST205 7 · 8 ST204
5 ST206 (上) 9 · 10 ST210

出土遺物

報告書抄録

ふりがな	なか							
書名	那珂62							
図書名	第129次調査の報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1157集							
編著者名	藏富士 寛							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号							
発行年月日	2012年3月16日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因	
那珂遺跡群 第126次	福岡県福岡市博多区 東光寺町一丁目 376-4	市町村 40130	遺跡番号 0085	33° 34° 27"	130° 25° 56"	20100601 ~ 20100707	1148.3	記録保存
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
那珂遺跡群 第126次	墓	弥生時代	壺棺墓9 溝1		壺棺 土器			
	集落・墓	古墳時代	土坑墓3 掘立柱建物2 櫛列1 溝1		須恵器 鉄器			
	集落	奈良時代	溝1		須恵器			
要約	今回の調査では調査区の一部ではあるが、弥生時代の墓を良好な状態で確認することができた。128次調査の成果もふまえれば、墓群は北西—南東方向へ列状をなしていることが明らかとなった。墓群に隣接する溝はこれに並行して延びており、関連する遺構であろう。また、今回の調査によって、128次調査においても検出していた櫛列は直線をなしていることがわかった。性格等の解明については周辺地域における今後の調査の進展に期待したい。							

那珂62

- 第129次調査の報告 -

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1157集

2012(平成24年)年3月16日発行

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 ソウヤマ印刷

福岡市博多区中興服町10-5